

野本京句集

『わたしがゐてもゐなくとも』抄

一九九一年 本阿弥書店刊  
二〇二六年 自選百句編集

泣きにゆく裏の竹藪伐られたり  
椿の実割れて知りたる殺意かな  
曼珠沙華かかへて遊ぶ昏さかな  
雪の夜やこころの鬼をつれだして  
早春や骨をならしておどろきぬ  
野苺を摘みてはるかな人傷む  
しかられしこひごころなり葛の花  
どつちみち生き恥さらす海鼠かな  
胡桃割れ嘘に嘘もて応へたり  
寒卵くらがりばかり足の向く  
闇汁の闇にまぎれし妬みかな  
執心の紅梅闇に咲くといふ

梵鐘の真下に佇ちて春昏し

狂院へ向くふらここを漕ぎにけり  
霾りて墓標のごとく忘らるる  
青梅の種いたむまで針を刺す  
白昼やむくろ喰みたる熱帶魚  
夕焼や黄泉の子が来て笛を吹く  
くれなるの蟹追ひつめてかなしめり  
木犀の風に隔たる人ありぬ

白鳥の首を猥らとそしりけり  
愛憎や熟柿押したる指の先  
手袋につきたる癡のうとましき  
枯山やわが逃亡の影を見し  
薄氷やうしろすがたに声かけて  
流水のとどまりたるはかの嗚咽  
枯芒鳴りゐる方へ誘はる  
わが墓標松露踏むたび近くなる  
白木蓮や別るる時をはかりあふ  
鯉幟をとこの市の立つ如し  
梅酒してふたりの地獄密閉す  
蜜月や羽蟻の翅をちぎりたる  
父と聞く蜻蛉のつるむ羽音かな  
曼珠沙華全身麻酔恍惚と  
蒜やひとの命をせんさくす  
手の中に細る石鹼十二月  
鷹渡るこんな小さな柩かな  
くつきりと死者の鷲鼻冬の夜  
ストーブのとくとくとくと哭きにけり  
襟巻に顔を埋めてただよへり  
ほろほろと焼芋喰ふもひとり減り  
裸木の枝降りて来る死者の声  
桃の日や人差指の血を洗ふ  
春闌けぬ不意に男のあらき息  
鉄くさき男を思ふ半仙戯  
満天星に触れし我らの生き残る  
うつしよやこほろぎほどになけたなら

梨剥くやわが骨髓はぼろぼろか  
臥してこそ臥したるこころ虎落笛  
しぐるるや肉食したる蒼生忌  
覗挿入水のごとく入りゆけり  
彼岸過はうれんそ<sup>う</sup>の砂を噛む  
怨靈の墓てふ形<sup>なり</sup>も麗らなり  
狂院の窓から春を惜しみけり  
慾深き夜をなだめて青葉木菟  
昼寝覚まだ病みゐたる故人はも  
かの汗の死病得しとは思はざり  
かぎりなし石榴の粒とわがままと  
芒原菩薩顔して立つてゐる  
寒の水父の嗚咽を忘るまじ  
風邪寝して恋に落ちたるごとくなり  
北窓を開けて多恨の夜なりけり  
なきがらや否応なしに菊籠めに  
恋敵それは上手にレモン切る  
きさらぎの影踏みあそび父を踏む  
椿山このごろ体冷たくて  
海胆突いて見ぬちのどこかきらめけり  
更衣亡き人ほどの男ゐず  
うをの目が痛し青葉の異人街  
鳩尾に触れてかそけき縮かな  
ボート漕ぐかなしからずやこがせをる  
ひとことに男を殺しさみだるる  
山川の色の溶けあふ鵜舟かな  
鴨田や汝が肉声に呼ばれたき

蓑虫にハモニカ吹いてやりにけり  
竹伐りに何の用かと問はれけり  
尋めゆけり黒花咲かすものの種  
かひやぐら蛤はいま睦みゐる  
螢火を追うて男につんのめる  
父の背の脂の匂ひ土用波  
呼びごゑ身にためゆけり芒原  
鰆酒や家のどこかがいつも鳴る  
歳晚やとろりとはがす魚の肝  
地下鉄の洞見てゐたり風邪心地  
家を出て行き処なかりし雛の夜  
ちちははの闇明りして雛の段  
散るさくらわたしがゐてもゐなくとも  
淋しさのたとへば百の風椿  
会はざればちちは老いず野分浪  
花束の出来あがるまで懐手  
あぢさゐにまだ色なくて多佳子の忌  
柚湯の香わが死にざまの如何ならむ  
わがこころ鳴りたる如し枯芙蓉  
降る雪に顔打たせけり最上川  
地団駄を踏みたきものの芽なりけり  
夜風哭く北窓開けて何もなし  
青き踏む多恨のわれと思ふなり  
虫出でよ虫出しの雷すぐ止むも